

『蜻蛉日記』の鶯と郭公

——道綱母の心象風景——

一 時過ぎたる鶯

和歌文学の世界において、鶯は古来、春を告げる鳥とされてきた。壬生忠岑が「春来ぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞ思ふ」(『古今集』春上・一一)と詠み、源順が「あらたまの年たちかへる朝より待たるものは鶯の声」(『拾遺集』春・五)と詠んだように、人々はその初声を心待ちにしていた。¹⁾

この誰もが賞美する鶯に対して難癖をつけたのが『枕草子』である。「鳥は」の段で、鶯が漢詩でも素晴らしいものとして詠まれ、声は勿論、姿も上品で愛らしいと始めに評価しながら論を転じ、そんな美点を持つているのに、宮中で鳴かないし、夜も鳴かない。一方で、夏秋の終わりまで老い耄れ声で鳴いて、「虫食い」などと呼ばれるなんて、と扱き下ろしている。鶯批判はその後ひとしきり続いた後、「されば、いみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬ心地するなり」という文で終結する。²⁾すなわちこれは、鶯の世間的評価が高いことを十分に認識した上で、最高のものは完璧であつてほしいという清少納言流の理屈なのだ。³⁾

その中で特に合点が行かないこととされているのが、春の鳥であ

赤 間 恵 都 子

るべき鶯が春を過ぎても鳴いていゝことである。清少納言は、先に掲げた『拾遺集』の源順歌を引いて、「春鳴くゆゑこそはあらめ。『年たちかへる』などをかしきことに、歌にも文にも作るなるは。なほ春のうち鳴かましかば、いかにをかしからまし」と述べている。

『枕草子』で鶯と比較され称讃される郭公は、夏の夜空を飛翔しながら鳴く独特の音調が印象的な鳥である。昼も鳴くが、その姿はなかなかとらえられない。日本に定住しているのが鶯で、夏季だけ日本で過ごす渡り鳥が郭公である。それぞれの鳥には生態的な違いがあり、清少納言が挙げる鶯の欠点はその習性に因つていゝ。鳥に人間側の勝手な注文を押しつけるのは理不尽な話だろう。³⁾

さて、清少納言が不服を唱えた夏の鶯が、『蜻蛉日記』には二例描かれている。一例目は兼家の夜離れが初めて一ヶ月以上続いた時に詠まれた鶯の和歌で、独詠歌である。

かくて数ふれば、夜見るとは三十余日、昼見るとは四十余日になりけり。心もゆかぬ世とはいひながら、まだいとかかる目は見ざりつれば、見る人々もあやしうめづらかなりと思ひたり。ものしおぼえねば、ながめのみぞせらるる。人目もいと

恥づかしうおぼえて、落つる涙おしかへしつづ、臥して聞けば、
鶯ぞ折はへて鳴くにつけて、おぼゆるやう、

鶯も期もなきものや思ふらんみなつきはてぬ音をぞなくなら
る
(中巻・天禄元年六月)

これは、本来の鶯の季節である春をとうに過ぎた六月の詠歌である。道綱母が兼家の訪れを待ち続ける日々はもう一ヶ月以上になっていた。周囲の侍女たちの目も気にかかり、涙をこらえて伏せているちよどその折、鶯の声が聞こえてきた。夏の終わりに鳴く鶯は、もう春告げ鳥としての意味を持たない。季節を超えていつまでも鳴いている鶯の声に、作者は果てしない物思いを続ける自分をなぞらえるのである。その一年後に鳴滝の山寺に籠もった際にも、季節を逸した鶯の声が作者の心を揺さぶっている。

さて、昼は日一日、例の行ひをし、夜は主の仏を念じたてまつる。めぐりて山なれば、昼も人や見むのうたがひなし。簾巻き上げてなどあるに、この時過ぎたる鶯の、鳴き鳴きて、木の立ち枯れに、「ひとくひとく」とのみ、いちはやく言ふにぞ、
簾おろしつべくおぼゆる。そもうつし心もなきなるべし。

(中巻・天禄二年六月)

鶯の鳴き声として記される「ひとくひとく」は、『古今集』の「梅の花見にこそきつれ鶯のくく人と厭ひしもをる」(誹諧歌・一〇一一)によった表現である。鶯が梅の花と共に詠まれる古今歌の季節は春だが、『蜻蛉日記』では六月に鳴く「時過ぎたる鶯」を

取り上げている。

この時、兼家から離れるべく山寺に籠もった道綱母は、後を追って来た兼家を一旦はねつけながら、心の底ではもう一度迎えに来てくれることを期待していた。そんな自分自身の気持ち、あの人がある、あの人がある」と鶯が声に出して言っているように聞こえたのは我ながら正気でなかったのだろう、と分析する。鶯は作者が直接口に出せない内心の思いを表現していると考えられる。

このように、和歌の世界には馴染まない時節を過ぎた鶯の描写には、作者の内面世界が色濃く反映していることが出来る。筆者は先に別稿で『蜻蛉日記』の郭公の歌を検討し、兼家と道綱母の最初の郭公の贈答歌が日記全体の主題に関わるものだったのではないかと考えたが⁵⁾、本稿ではその考察をさらに進め、郭公と対照される鶯の歌についても見解を述べることにした。

二 郭公 — 浮気な夫の表象として —

『蜻蛉日記』には郭公の用例が十六例ある。『源氏物語』までの王朝散文作品の中で鶯と郭公の用例数を比較してみると、どちらの用例も見えないのが『竹取物語』、二例ずつあるのが『伊勢物語』で、鶯が郭公より多い作品は『うつほ物語』、『大和物語』、『土佐日記』、『源氏物語』となる。ただし、十二月から二月にかけての記事しかない『土佐日記』に郭公が登場しないのは当然のことで、同様に、初夏に始まって正月早々の記事で終わる『和泉式部日記』には鶯が登場しない。

その『和泉式部日記』の他に鶯より郭公の用例が多い作品は、『落窪物語』、『蜻蛉日記』、『紫式部日記』、『枕草子』である。このうち郭

公びいきの『枕草子』が最多数の二十例を数え、『蜻蛉日記』は『枕草子』について郭公の用例が多いことになる。ちなみに鶯の用例が最多を数える『うつほ物語』には郭公も十八例あるが、作品の分量を考慮すると、『蜻蛉日記』の方がより頻繁に郭公が登場するとと言えるだろう。(表1参照)

(表1)

作品名	鶯	郭公
竹取物語	0	0
うつほ物語	30	18
落窪物語	0	3
伊勢物語	2	2
大和物語	7	2
土佐日記	1	0
蜻蛉日記	12	16
和泉式部日記	0	4
紫式部日記	0	1
枕草子	4	20
源氏物語	23	11

次に、『蜻蛉日記』中の郭公の登場時期を調べてみると、巻によって大きな偏りがあることが分かる。(表2参照)

(表2)

	鶯	郭公
上巻	2(2)	2(2)
中巻	5(2)	2(1)
下巻	5(1)	12(7)
計	12(5)	16(10)

()内は和歌の用例数で、内数を示す

郭公の用例十六例中、十二例が下巻に現れるのである。ただし、『蜻蛉日記』における最初の贈答歌に郭公が登場していることは注目してよい。それは上巻の冒頭で兼家と道綱母が初めて交わした贈答歌である。

日記の記事は、右大臣師輔の三男兼家の求婚を受けた道綱母の当惑から始まる。「本朝第一美人三人内也」と『尊卑分脈』に記された才色兼備の道綱母も一介の受領の娘であり、摂関家の息子との婚姻を断るすべはなかった。それを承知の上でなのか、あるいは兼家自身の性格なのか、求婚の文は形式も内容も女に対する思いやりのないストレートなものだった。そのやり方になんか返事を躊躇する道綱母だったが、母の意見に従って返歌を詠む。道綱母が兼家の文を見た部分からの本文を引いてみよう。⁶⁾

見れば、紙なども例のやうにもあらず、いたらぬところなし
と聞きふるしたる手もあらしとおほゆるまで悪しければ、いと
ぞあやしき。ありける言は、

音にのみ聞けばかなしなほととぎすこと語らはむと思ふ心
あり

とばかりぞある。「いかに。返りごとはすべくやある」など、
さだむるほどに、古代なる人ありて、「なほ」とかしこまりて
書かすれば、

語らはむ人なき里にほととぎすかひなかるべき声なふるし
そ

求愛歌に女が直に返歌することが男の意向を受け入れることを意味

していた当時、道綱母も事態を受け入れたことになる。しかし、返歌で彼女なりの反旗を翻していたのではないだろうか。なぜなら二人の和歌の贈答に何かしっくりしないものを感じるからである。

道綱母の返歌は兼家の和歌の下句に詠まれた「語らはむ」という語から始まり、上句に詠まれた郭公を用いて、形式的には贈歌を受けている。しかし、郭公の用い方にずれがある。兼家が姿をなかなか現さない郭公に道綱母をたどえて直接会いたいというのに対して、道綱母は兼家を郭公にたとえ、どんなに鳴いても無駄ですと答えている。二人の歌が互いに相手を郭公にたとえて詠むのは、一組の贈答歌として考えると何か引つ掛かる。

比較のために下巻に記される道綱と大和の女との郭公の贈答歌を引いてみよう。

五月のはじめの日になりぬれば、例の、大夫、

うちとけて今日だに聞かむほととぎすしのびもあへぬ時は
来にけり

返りごと、

ほととぎすかくれなき音を聞かせてはかけはなれぬる身と
やなるらむ

(天延元年五月)

ここでは大夫道綱が女を郭公にたとえ、五月になったのだからあなただの声を聞きたいと言ったのに対し、女も自分を郭公にたとえて、私の声をすっかり聞かせてしまうことはできないと答えている。このように、内容的にはねつけるものであっても、相手のたとえを受

けて答えるのが通常の贈答形式ではなかったろうか。息子の詠歌の制作には道綱母も関わっていたと考えられるが、この歌と比べると、日記冒頭の道綱母自身の返歌の頑なさが際だって見える。

兼家の郭公のたとえをすり替えて答えた道綱母の返歌は、恋愛のはねつけ歌という慣例とは別の意味で、贈歌を素直に受け入れていない歌なのではないか。この返歌には、兼家の求婚に対して作者から言っておきたい思いが込められていたのではないだろうか。そのように考えた時に思い浮かぶのは『古今集』の次の歌である。

郭公汝が鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから

(夏・一四七)

この歌は『伊勢物語』にも採られ、ここでは浮気者の女に対して男が詠んだ歌になっているが、郭公を浮気者にたとえる設定と郭公が鳴く「里」の語とに注目したい。

『古今集』のこの歌を踏まえると、道綱母の返歌に詠まれる郭公は、たくさんの里(＝通い所)を持つ浮気者(＝兼家)を指しているのではないかと考えられる。兼家が道綱母を郭公に見立てて結婚したいと申し出たのに対し、道綱母は兼家を郭公に見立てて、浮気者のあなただの相手になるような女はこの里にはいませんと答えた。結婚後の道綱母の状況は、兼家のあまたの通い所に苦しみながらも夫に執着する毎日であり、『古今集』のこの歌がまさに当てはまっている。兼家の求婚を受けた時点から、道綱母はその状況を不本意ながらも予測していたのではないかと思うのである。

さて、冒頭の贈答の後、日記中の和歌に郭公がしばらく詠まれる

ことはない。その間に結婚生活は、兼家があまたの里を平気で飛び回る郭公そのものであったことを証明していく。日記冒頭の和歌以来、郭公は作者にとつてどうしても兼家と結びついてしまう歌語になつていたと考えられる。その束縛から解かれ、兼家から離れた郭公が最初に詠まれるのが下巻二年目の天延元年五月で、先に掲げた道綱と大和の女の贈答歌においてであった。

翌天延二年の日記最終年には、道綱母が引き取つた養女に、道綱の上司にあたる藤原遠度が求婚してくる。そこで遠度と、養女の母の立場にある道綱母との間に郭公の贈答歌が集中的に詠まれていく。遠度と養女との結婚が兼家にも承認され、縁組が順調に進むように思われた二ヶ月後、遠度の醜聞が流れてくる。郭公の贈答による求婚は男の浮気心によつて突然断ち切られたのである。

『蜻蛉日記』で郭公にたとえられた男は、あまたの里を持つ浮気者として、その正体を現していく。道綱母は養女の結婚が破談になつたことに対して胸をなでおろしているが、郭公にたとえられた男との結婚は自分一人で十分だと思つたのかもしれない。作者にとつて郭公は自分を悩ませた夫兼家とそれに連なる世間の男達の象徴だつたと考えられよう。

三 鶯 — 夫を待つ女の表象として —

次に、『蜻蛉日記』の鶯について考えてみたい。日記中の鶯の用例は全十二例、そのうち和歌に詠まれるものは五例である。郭公に比べるとやや少ないが、先に掲げた散文作品の中では、長編物語である『うつほ物語』、『源氏物語』に次いで多い用例数になつている。

(前掲表1参照)

鶯は『蜻蛉日記』の中で、郭公と対比されつつ用いられているのではないだろうか。日記中の鶯の用例分布を見ると、郭公ほどの偏りはないが、郭公の場合と同様に、上巻の始め頃に詠まれた道綱母と兼家の一对の贈答歌が注目される。(前掲表2参照)

それは天曆八年秋の結婚からしばらく後の正月のことであつた。

正月ばかりに、二三日見えぬほどに、ものへ渡らむとて、「人
来ば取らせよ」とて、書きおきたる、

知られねば身をうぐひすのふりいでつつなきてこそゆけ野
にも山にも

返りごとあり、

うぐひすのあだにてゆかん山辺にもなく声き聞かばたづぬ
ばかりぞ

(上巻・天曆九年一月)

新婚生活で初めて迎えた正月のある日、作者は用事で家を留守にすることに、兼家に置き手紙を残して出かけた。夫への和歌には、自らを鶯にたとえ、「うぐひす」に「憂く」をかけて、自分の身上を悲観し嘆きながら家出したという意味のことを詠んだ。まだ結婚後間もないころであり、道綱母の和歌は夫の関心を引こうという意図によつて詠まれたのだろう。兼家からの返歌は、作者を鶯にたとえる贈歌を受けて、その鳴き声を聞いたらどこまでも尋ねていくというものだつた。

兼家が自分をどこまでも尋ねてくるという返歌は、道綱母にとつて新婚時代の思い出に残るうれしい和歌だつたに違いない。以後、

この歌の鶯は作者の化身として日記中に登場していくことになったのではないだろうか。『蜻蛉日記』の郭公が兼家を意味していたのに対して、鶯は兼家を待つ作者自身を意味する語として機能していくとみる。そのような視点から眺めると、この次に登場する中巻の鶯が、第一節に掲げたように、時節を過ぎた姿であることが頷ける。

春の到来を歌い上げるべき鶯が、季節を越えていつまでも鳴いている様子は、新婚時代に「知られねば身をうぐひすの」と戯れに詠んだ和歌の状況が現実となり、夫の訪れがないままいつまでも嘆いている作者自身の姿と重なったものと考えられよう。そのような六月の鶯が登場するのは、兼家との関係で道綱母が煩悶していた中巻に限られている。和歌世界に馴染まない時過ぎたる鶯は、日記世界で作者自身の投影としての意味を付せられているのである。

次に鶯本来の季節である春の記事について『蜻蛉日記』を通覧してみると、中巻最後の天禄二年から下巻最後の天延二年までの四年間に毎年続けて合計六回、一月二月の鶯を取り上げていることが分かる。上巻では最初の贈答歌以来、春の鶯が一度も取り上げられていなかったことを考えると、これは留意すべきだろう。以下、順に見ていこう。

中巻第三年目の天禄二年は、次のような作者の心中思惟で始まる。

さて、年ごろ思へば、などにかあらむ、ついたちの日は見えす
してやむ世なかりき。さもやと思ふ心遣ひせらるる。

天曆八年（九五四）に結婚してから十八年間、考えてみればどういうわけか、正月一日に兼家が作者の家を来訪しないことはなかった

という。それまで気づかなかった事に気づくのは、当たり前だと思っていたことを失った時である。その年の正月、兼家は結婚後初めて道綱母宅への元旦の訪問を怠った。そればかりか、道綱母の家の近くに住んでいた近江の女のもとへ通うために、何日も前渡りを続けた。

数日後によくやく訪れた兼家は、平然とした顔で道綱母の愁訴を聞き流した上、戯れてかけてくる。その態度に閉口した作者が石木のようにして夜を明かし、翌朝、兼家がものも言わずに帰った後のことである。

それより後、しひてつれなくて、「例の、ことわり。これ、としてかくして」などあるも、いと憎くて、言ひ返しなどして、言絶えて二十余日になりぬ。「あらたまれども」といふなる日の気色、鶯の声を聞くままに、涙の浮かぬ時なし。

（中巻・天禄二年一月）

兼家から何事もなかったかのように、縫物依頼の文が送られてきた。妻の気持ちをあえて無視してやり過ごそうとするのが兼家のやり口なのだ。そんな夫に対して、道綱母が強く反発し言い返してしまつてから消息が絶え、二十日余りが過ぎていった。周囲には新年の気配が漂うが、夫とけんか別れた正月に鶯の声を聞くと涙がとまらなくなる。このような嘆きの中で、鶯が作者の気持ちを一層揺さぶるのが中巻の世界であった。

しかし、その一年後の下巻になると様相は異なってくる。

今日は二十三日、まだ格子はあげぬほどに、ある人起きはじめて、妻戸おし開けて、「雪こそ降りたりけれ」と言ふほどに、鶯の初声したれど、ことしも、まいてこちも老い過ぎて、例の、かひなきひとりごともおほえざりけり。

(下巻・天禄三年一月)

この年は鶯の初声を聞いても、いつものように「かひなきひとりごと」(＝独詠歌)さえ浮かんでこない。それを作者自身も不思議に思っている。さらに同年の二月には次のように記される。

このごろ、空の気色なほりたちて、うらうらとのどかなり。暖かにもあらず、寒くもあらぬ風、梅にたぐひて鶯をさそふ。鶏の声など、さまざまなごう聞こえたり。

(下巻・天禄三年二月)

春のうらかな情景描写の中に余裕を持つて鶯を記す作者は、男女の別れの時を告げる鶏の鳴き声さえ冷静に聞いている。ここには、兼家の来訪を希求する作者の思いは感じ取れない。さらに下巻二年目には、鶯の声をしみじみと受け止める心情が描かれる。

さて年暮はてぬれば、例のごとして、ののしり明かして、三四日にもなりにためれど、ここには、改まれるこちもせず。鶯ばかりぞいつしか音したるを、あはれと聞く。五日ばかりのほどに昼見え、また十余日、二十日ばかりに、人寝くたれたるほど見え、この月ぞすこしあやしと見えたる。

(下巻・天延元年一月)

兼家が正月早々の道綱母邸訪問を怠ることがもはや通例になっていた。鶯の声はそんな夫を待つ自分自身を「あはれ」ととらえさせたのだろう。正月五日に初めて訪れた兼家は、その後、普段より道綱母のもとに足繁く通ってくるが、それに対して、「すこしあやしと見えたる」(波線部)と記している。作者は夫の愛情を信じようとする気持ちをすでに失っているのである。同年八月、道綱母は父の所有する郊外の別荘に移り住むことになる。

そして、日記最終年にあたる天延二年には、前年の転居以来、夫との関係が絶えてしまったことを顧みる心情が記され、独詠歌が詠まれている。

柱に寄り立ちて、思はぬ山なく思ひ立てれば、八月より絶えにし人、はかなくて正月にぞなりぬるかとおほゆるままに、涙ぞさくりもよよにこぼるる。さて、

む
もろ声に鳴くべきものを鶯は正月ともまだ知らずやあるら
とおほえたり。

(下巻・天延二年一月)

兼家との決別を確認した途端、涙がこみ上げてきて、激しく泣いてしまった道綱母。この独詠歌は作品中最後の鶯の歌である。夫と離れて一人きりになった道綱母と一緒に泣いてくれるはずの鶯が、正月になっても鳴かない。あの新婚の日、鶯となつて飛んでいった自分をどこまでも追いかけていくと言った夫を信じていた時から、

ずっと一緒に鳴いてくれるはずだったのに、鶯は正月になったことを知らないのだろうか、作者は詠んだ。

その年の二月、思い立って出かけた山奥の寺でも、もう、鶯の声はしなかった。

あるところに、忍びて思ひ立つ。「なにはかり深くもあらず」といふべきところなり。野焼などするところの、花はあやしうおそきころなれば、をかしかるべき道なれど、まだし。いと奥山は鳥の声もせぬものなりければ、鶯だにおとせず。水のみぞ、めづらかなるさまに、湧きかへり流れたる。

(下巻・天延二年二月)

作者の傍から鶯が消えた時、それは上巻で兼家と鶯の贈答歌を交わした時点から、すっかりかけ離れてしまった自身の境遇を作者が自覚した時であった。『蜻蛉日記』の鶯は、夫を待つ作者自身の投影であったがゆえに、待つべき相手を失った時、日記世界から退場してしまったものと考えられる。

四 まとめ

『蜻蛉日記』における郭公と鶯の用例を対比しながら本文を読み、二鳥の登場場面における作者の内面描写を辿ってきた。鶯と郭公のそれぞれの季節である春と夏が二〇回以上も巡る中で、『蜻蛉日記』で二鳥が取り上げられる時期には検討すべき問題があった。上巻の最初で、郭公は求婚時、鶯は新婚時代に兼家と道綱母の贈答歌として一往復ずつ詠まれるが、その後、同様な形で二鳥が詠まれること

はなかった。その理由として、この最初に交わされた贈答歌が、鶯と郭公の日記におけるそれぞれの役どころを定め、その後の用例を左右することになったためではないかと推定した。すなわち郭公は浮気者の兼家を象徴するものとして、鶯は兼家を待つ道綱母の象徴として、『蜻蛉日記』の世界の中で意味づけられることになったと考えたのである。

上巻から中巻、さらに下巻に進み、道綱母と兼家との関係が変化していくにつれ、郭公と鶯の作品内の現れ方も変わっていく。中巻の途中で郭公が兼家の投影としての役目から離れ、下巻では速度が新たな郭公として道綱母と贈答歌を交わすようになる。その直前に道綱母自身を投影していた鶯も下巻で姿を消してしまう。兼家への信頼を失い、夫を待つことを断念していく道綱母の心の表象が郭公と鶯であった。

本稿では、結婚生活が破綻に至るまでの心の軌跡を描くという『蜻蛉日記』のテーマを、作者が郭公と鶯を利用して表現したと考えた。和歌世界の中で、春と夏、それぞれの季節の到来を告げる鶯と郭公は、『蜻蛉日記』の世界では協同して、浮気な男(郭公)を待つ女(鶯)の象徴として道綱母の心象風景の中に鳴く鳥となっているのである。

注(1) 本稿の引用和歌は『新編国歌大観』の本文により、漢字表記を適宜改めた。

(2) 『枕草子』本文は新編日本古典文学全集(小学館)による。

(3) 『枕草子』を読んだ平安人が鶯についてどう思ったかは知るよしもないが、『万葉集』と『拾遺集』までの勅撰和歌集を総覧してみると、鶯

より郭公の方が歌の数が多い。

郭公の歌が鶯の歌の三倍も多い『万葉集』を筆頭に、三代集でも郭公の歌は鶯の歌の二倍程度の数が採られている。日本古来の和歌に詠まれる鳥としては、郭公の方がより好まれていたということであろう。

歌集名	鶯	郭公
万葉集	50	150
古今集	26	42
後撰集	17	39
拾遺集	21	40

※それぞれの歌集の歌数は『新編国歌大観』によった。

(4) 『大和物語』第一七三段に、良岑宗貞が関わった五条の女の独詠歌として、「よもぎ生ひて荒れたる宿をうぐひすの人来と鳴くやたれとか待たむ」が載る。これも正月の歌であるが、内容的には『蜻蛉日記』の歌により近いと思われる。

(5) 拙稿「ホトトギスを待つ女―道綱母の和歌へのこだわり―」『日記文学研究 第三集』（新典社 二〇〇九年十月）所収

(6) 『蜻蛉日記』本文は新編『日本古典文学全集（小学館）』による。

(7) 速度と道綱母の贈答歌の中で、郭公はすべて速度をたとえる形で詠まれている。

(8) 「うぐひす」に「憂く」を掛ける詠み方は、『古今集』（恋五・七九八）「我のみや世を鶯となきわびむ人の心の花と散りなば」に見られる。当該歌は「読人しらず」として掲げられ、『小町集』に載る和歌である。「身を鶯の」と「世を鶯と」の違いはあるが、恋人に捨てられる女の嘆きを鶯の鳴き声に重ねるところは共通している。他にあまり例のない用法である。